様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１１８７

研究課題名（和文）超高齢多死社会におけるデス・ワークの活動展開に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Industrial Activities of Deathwork in a Super-aged and High-mortality Society

研究代表者
田中　大介（Tanaka, Daisuke）

自治医科大学・医学部・教授

研究者番号：２０６３４２８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、わが国におけるデス・ワーク、すなわち「死後措置および遺体処置に関する仕事」に焦点を当て、その活動展開が今日の超高齢多死社会で果たしている役割を把握することを目的とした取り組みである。申請者は国内各地の関連事業者を主な対象として調査を実施し、今日の死と看取りをめぐるプロセスを支える上で現代的なデス・ワークの実践が社会的な基盤としても位置づけられる重要性を持つことを明らかにしたと同時に、その職能に対する需要の背景を捕捉することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
高齢者の老い・死・看取りという射程を有した研究は、主に医療および介護の実践に注目した諸分野で蓄積されてきたものの、それらの研究は往々にして短期的なスパンで生じている各種の事象に照射するものであった。これに対して本研究は老いから死後までの期間を連続した中長期の過程として捉え直すことで従来の研究を相対化する意義を持つと同時に、デス・ワークという独自の研究対象に光を当てることによって、今日的な死の様態をめぐる現実的かつ多元的な課題を新たな視座から捕捉するという成果をあげた。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on mortuary practioners' work related to post-mortem disposal of corpses as "deathwork" to understand their professional role and significance in a super-aged and high-mortality society. This study examined fieldwork that primarily targeted industrial organizations and employees in various parts of Japan.It identified the increasing importance and demand of contemporary mortuary practices as an important part social foundation to support the processes of death.

研究分野：文化人類学

キーワード：死　デス・ワーク　死後措置　超高齢社会　多死社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)学術的背景

本研究は文化人類学ならびに質的調査のアプローチを基軸としているが、本研究に関連する代表的な分野としては他に医療社会学・家族社会学・老年学・デス・スタディーズ（死の研究）などを挙げることができる。だが、それらの諸分野では往々にして「死に逝く局面」・「死の局面」・「死後の局面」が個別の断片的かつ点的な出来事として扱われることも多く、死という出来事をめぐって高齢者のライフコースに生じる中長期的な生活設計上の困難を精緻に捕捉する研究は未だ十分とは言えない状況にあったことも否めない。さらに、本研究の焦点であるデス・ワークという研究対象は、1960 年代以降の医療社会学やデス・スタディーズ（死の研究）の分野において部分的に扱われてきたが、それらの研究の多くは医療施設内で生じる死亡事象の制度的な文脈構築という問題意識を土台としていたと言えよう。

これらの背景を踏まえて、本研究ではデス・ワークを「死後措置および遺体処置に関する仕事」として再布置し、死と遺体に接することが日常労働の中心となる非－医療的な事業体に照射することにより、医療に関連する領域に留まらない広汎な視座から「死と看取りの現場」に接近するとともに、死という事象に取り組んできた従来の研究の再省察と相対化を試みることとした。

(2)社会的背景

わが国における高齢化と多死化の複合的動向は単なる人口動態上の量的趨勢だけではなく、高齢者と死亡者の社会的遍在がもたらす死と看取りの質的な変容としても捉えられる。単身者を含む「高齢者のみ世帯」が常態化している現在では、いわゆる老々介護をめぐる苦難などがメディアで盛んに報じられているが、身体的衰弱や疾病のみならず「死ぬこと」そのものが高齢者の生活にとって重大なリスクになりつつあることは、たとえば生前から死後のさまざまな手立ての準備を指す「終活」という言葉が広汎な浸透を見せていることや、葬儀や埋葬などの手立てを含む生前契約および任意後見に対する関心の高まり、あるいは世代間継承を前提としない永代供養墓の需要増などからも顕著に窺うことができる。

本研究が上述の通り非－医療的な事業体に注目すると同時に、とりわけ葬儀業を中心としたデス・ワークに携わる事業体の多様な活動に着眼したのは、上述のような医療や介護の領域を超えて生起する「高齢者の死と看取りをめぐる困難」を受けとめる存在として、それらの事業体が社会的役割を拡大しつつあることに基づく。とりわけ、従来のような地縁・血縁を主体とした人間関係に頼ることができない高齢者は今後も増加することが見込まれており、安寧な死と看取りを高齢者に提供するための社会基盤を構築することはわが国にとって喫緊の課題と見なしても過言ではない。以上の視点を踏まえて、本研究ではフィールドワークを主体とする調査研究を通じてデス・ワークの現代的な活動展開を捕捉し、「今後も継続する高齢化と多死化に対して、デス・ワーク事業体は有効な社会資源となり得るか」という問題を考究することを目論んだ。

２．研究の目的

(1)焦点事項

上述の「１．研究開始当初の背景」に基づき、本研究では以下 4 点の目的を研究活動の全体を通じて共通する焦点事項として設定した。

①死と看取りをめぐって今日の高齢者が直面している生活設計上の問題を把握する。
②今日のデス・ワーク事業体が、その問題に対してどのようなサービスを提供しているか、またはし得るかを捕捉する。
③調査情報と関連研究の知見を結びつけて学際的に省察し、横断的な連携も含めた望ましいデス・ワークのありかたを考究する。
④上述に関する学術的な成果物を調査対象の関係者・関係機関に還元する。

(2)将来像の探究

本研究は今まで十分な調査研究が行なわれてきたとは言い難いデス・ワークという題材に注目することにより、死と看取りをめぐる問題群に取り組んできた従来の研究の再省察と相対化を目指している点で独自性を持つと言える。また、その独自性は単なる「新しい研究対象の発見」という意味合いではなく、ともすると一方的なケアの受け手として図式化されてきた高齢者を能動的な「生活者」として捉え直すと同時に、今日の超高齢多死社会が直面している困難の多元性に可能な限り接近して、社会的還元を図る創造的かつ応用的な営為としても捉え得るものである。これらの点を踏まえて、本研究では前項「(1)焦点事項」に示した通り、デス・ワークの活動展開と、そのサービス内容や組織形態などの捕捉を通じて、今日の死と看取りをめぐる生活設計上の課題を明らかにしようと試みるが、同時に本研究は一連の調査研究のプロセスを通じてデス・ワーク事業体が有する社会資源としての潜在力と可能性を探り、超高齢多死社会に対応し得るデス・ワークの望ましい将来像を探究することも大局的な目的に含めている。

３．研究の方法

(1)フィールドワーク

本研究は前述の通りフィールドワークによる質的調査のアプローチを研究活動の中心として設定した。しかし研究年度の初年度に当たる 2020 年度から生じた COVID-19 のパンデミックと、それに伴う移動や対面接触などの多岐にわたる制限に影響を受けることを余儀なくされ、当初計画を変更している。ただし、この COVID-19 のパンデミックに応じた活動の変更は、研究全体の目的や趣旨を損ねるものではなく、着実な研究成果を目して検討した結果によるものである。以下に、当初計画との相違を記述に含めながらフィールドワークの概要を示す。

本研究では都市部・村落部・島嶼部の各地におけるフィールドワーク断続的実施を目論んで、当初計画では①北海道札幌市、②宮城県仙台市、③愛知県名古屋市、④石川県七尾市、⑤大阪府大阪市、⑥広島県広島市、⑦徳島県鳴門市、⑧福岡県福岡市、⑨鹿児島県西之表市（種子島）、⑩沖縄県石垣市（石垣島）の 10 地域を調査地に選定していたものの、特に地理的な閉鎖性の高い島嶼部の調査は断念せざるを得ず、その代わりに大阪府内と福岡県内の各地を中心的な調査地に選定して活動を実施した。

また調査対象となる事業体として、当初計画では①葬儀業、②火葬場、③納棺業、④遺品処理業、⑤エンバーミング事業、⑥霊園事業、⑦生前契約および任意後見に携わる団体、⑧地方自治体の 8 種別にわたる対象を網羅的に調査する予定であったが、過去の研究からの連続性も考慮して葬儀業を主要な調査対象に選定し、他の対象については補足的な位置に留めることとした。

(2)文献資料類の精査と分析

上述に示したフィールドワークと合わせて、本研究では文献資料類の精査と分析についても重点的な調査アプローチとして並行実施した。これについては当初計画から特に変更を生じることはなく、①デス・スタディーズ、②家族・ライフコース、③葬制・墓制、④高齢者研究を中心的な分野に設定して、歴史的な背景から理論的な探究に至る精査を進めることができた。

(3)その他

本研究は当初計画で 2020 年度から 2022 年度にわたる計 3 ヶ年度の研究期間を予定していたが、COVID-19 のパンデミックに伴う調査対象の再検討や再折衝などを余儀なくされたことにより期間を延長した。

４．研究成果

本研究は上述の通り COVID-19 のパンデミックによる影響を受けて当初計画から若干の修正を行い、葬儀業を主要な対象として選定した上で、デス・ワーク事業体の中核をなす存在として調査を実施することとなった。だが、この修正によって所期の目的が損ねられることはなく、むしろ対象の種別を集中化させたことによって密度の濃い調査情報を得ることができた。

とりわけ葬儀業従事者がどのように自らの業務とサービスをケアや公共性の範疇で捉え、その文脈がいかに再生産されているかという様相は、研究期間内に刊行した論稿などの成果によっても部分的に発表しているが、デス・ワークに関する実践の多くが葬儀業と同様の対人サービスを中核としており、その傾向と複雑な機微の要求がますます強まっているのに対して、本研究は従来の諸研究がデス・ワークをマニュアル化ないしは「人間性を排した大量生産的な機構による世俗化」といった第三次産業に対する旧態依然とした観点から捉えていることを相対化し、その観点を更新する必要性を示す成果を挙げた。

また、このようなケアや公共性の理念は今日のデス・ワーク事業体が手がける諸実践において顕著に観察できるだけでなく、デス・ワークの社会的・公共的な側面を消費者に伝える際に強調される要素となっている。たとえば近年の葬儀業は単なる葬儀サービスの受注に留まらず介護・保険・保育などの分野に進出しているが、この背景として少子高齢化に対する社会的不安が存在することを調査の過程で強く窺うことができた。特に家族構造の変化と世帯規模の縮小は現代的な死と看取りのありかたに大きな変容をもたらしており、曾祖父母から孫までが同居するような、複数の世代で構成される大家族がすでに希少なケースになっている現在では、家族・親族・友人・知人などが死にゆく者の自宅に集まって負荷を分かち合うことが困難になりつつある。それはまた、自らの死や近親者との死別が自然な時間の経過とともに「迎える」ものではなく、能動的に「対処する」ことを必要とする人生設計上の課題になってきたことを意味している。

この点で葬儀業に代表される各種のデス・ワーク事業体は、将来に待ち受ける死と看取りをサポートして生活者の不安を解消するためのさまざまな便宜を提供すると同時に、死者＝遺体の人格に対するケアまでを含めた、多角的かつ公共的な理念との融合を模索している状況が調査から明らかになった。それはまた、死と看取りを人生設計の射程内におさめたいという社会的な需要を反映したものであるが、このように本研究によってデス・ワークという存在が超高齢社会において欠くべからざる社会資源として位置づけられることをフィールドワークから把握できた一方、さらに発展的な研究が要請されていることも認識する結果となり、その点を今後の学術的な課題と展望として示すことができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 田中大介	４．巻 令和4年度事業
２．論文標題 オンライン葬儀の需要と可能性：情報化による職能実践と儀礼実践の変容（その2）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集	６．最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中大介	４．巻 575
２．論文標題 葬儀をめぐる変化と動向の諸相	５．発行年 2023年
３．雑誌名 生活協同組合研究	６．最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57538/consumercoopstudies.575.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中大介	４．巻 令和5年度事業
２．論文標題 葬儀業における情報通信技術の導入と選択：情報化による職能実践と儀礼実践の変容（その3）	５．発行年 2024年
３．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集	６．最初と最後の頁 ※近刊・未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中大介	４．巻 令和3年度事業
２．論文標題 情報産業としての葬儀業：情報化による職能実践と儀礼実践の変容	５．発行年 2022年
３．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集	６．最初と最後の頁 94-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹内一真・海老田大五朗・田中大介	4．巻 13
2．論文標題 技能への質的調査法を用いたアプローチと新たな可能性	5．発行年 2021年
3．雑誌名 質的心理学フォーラム	6．最初と最後の頁 pp.65-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中大介	4．巻 (令和2年度事業)
2．論文標題 弔いとケアの融合：家族葬、および葬儀業のキャリアパスに関する事例研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所 論文集	6．最初と最後の頁 pp.67-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中大介	4．巻 (令和元年度事業)
2．論文標題 現代葬儀におけるケア概念の構築と再生産：葬儀業の専門家システムに関する調査研究の現状と展望（特集「技能を見つめる」）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所 論文集	6．最初と最後の頁 pp.37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹内一真・海老田大五朗・田中大介	4．巻 12
2．論文標題 心理学・人類学・社会学における技能研究の現在：実践を通じて獲得された知性はいかに研究されてきたのか（特集「技能を見つめる」）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 質的心理学フォーラム	6．最初と最後の頁 pp.45-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹内一真・海老田大五朗・田中大介	4．巻 12
2．論文標題 討論：技能研究の未来と可能性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 質的心理学フォーラム	6．最初と最後の頁 pp.5-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中大介	4．巻 85(3)
2．論文標題 書評 金セッピョル著『現代日本における自然葬の民族誌』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 pp.553-556
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　9件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 田中大介
2．発表標題 若年層の祖先祭祀をめぐる規範と選択の重層性
3．学会等名 シンポジウム 東アジアの若年層にみる「祖先祭祀」の現在
4．発表年 2022年

1．発表者名 田中大介
2．発表標題 地域での集住における看取りのデザイン
3．学会等名 地域デザイン学会 地域健康フォーラム2022「地域社会にみられる医療と生活の融合」
4．発表年 2022年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 地域で看取ることの人類学的考察
３．学会等名 地域デザイン学会 第11回全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 看取りと葬送の変容：「死の文化」について考える
３．学会等名 文化看護学会第14回学術集会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 COVID-19感染拡大時における死後処置プロセスの漸次的構築
３．学会等名 科研費基盤研究B「超高齢多死社会を見据えた葬墓制システムの再構築：多様な生前と死後をつなぐために」第2回研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 COVID-19のパンデミックと遺体処置
３．学会等名 科研費基盤研究A「少子化に揺れる東アジアの父系理念：祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究」第13回研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 COVID-19の発生に対する葬儀業の初動と展開
３．学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究」第3回研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 地域の看取りをめぐる文化的デザインの構築
３．学会等名 地域デザイン学会 地域健康フォーラム2021「地域医療へのZTCAの適用」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 「死と葬儀」の再省察：社会－文化研究の潮流を中心に
３．学会等名 日本葬送文化学会定例会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 TANAKA Daisuke
２．発表標題 The Japanese Way of Death: A Brief Depiction of Emotions in Mourning and Funeral
３．学会等名 公益財団法人セゾン文化財団 Museum of Human E-motions 2020（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 弔いの文化と技術
３．学会等名 JST-RISTEX ELSI 技術死生学プロジェクト主催セミナー・第94回サイエンスらいおんカフェ（共催：自治医科大学・とちぎサイエンスらいおん、後援：下野市）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 COVID-19と葬儀業
３．学会等名 ケアの人類学研究会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 田中大介・田代志門（共著・章分担）	４．発行年 2022年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 388
３．書名 現代日本の「看取り文化」を構想する（担当部分 pp.3-27、「死の研究」の現在：人類学・社会学の系譜から）	

１．著者名 田中大介（章分担）	４．発行年 2022年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 388
３．書名 現代日本の「看取り文化」を構想する（担当部分 pp.347-367、COVID-19と葬儀業）	

１．著者名 田中大介（分担執筆）	４．発行年 2021年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 692
３．書名 世界の食文化事典（野林厚志他編・国立民族学博物館編集協力）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関